井細田物語

『いさいだ』が初めて現れるのは，永正１６年（１５１５）、北条早雲の時代の文書である。どんなわけで、この地が「いさいだ」という名前になったか、はっきりしない。

①いせだ【伊勢田】

むかし伊勢神社にお参りするのに費用がだいぶかかった。そこで、村の代表を選んで行ってもらうことにしたという。その費用は、共同の田を耕作し、その出来高を積み立ててあてた。

この共同の田を「伊勢田」という。「井細田」はこの「伊勢田」から来ているのではないか？

②いしょうだ【衣装田】

神に奉仕する、巫女【みこ】の化粧料を捻出するための田。はたして『八幡神社』に巫女が仕えていたのかどうか、はっきりしない。

しかし、駐在所裏に「巫女橋」（いちこばし）があることなどから、神社の「巫女」の衣装・化粧代のための田、「衣装田」が訛って、「井細田」となったとも考えられる。

③いさきだ【居崎田】

久野川の氾濫原の土地である。池上・荻窪の丘，多古丘陵の先に発達した水田地なので、『サキダ』。上に『イ』がつく。これは接頭語で『その場所』を表す表現だという。

④いさらいだ【小井田】

ここは、久野山よりの小井（イサライ）をひいて水田を開いた。「イサライ」は水の少ない流れのことを言う。「イサライ」が「イサイダ」になったのか？

＊他に、神社の祭典費用を作り出すための「斎田」「祭田」から井細田になったという説もある。

井細田の行政的変遷

- **明治２２年　井細田村、多古村、今井村を合わせて、二川村が誕生する。**
- **明治４１年、二川村、芦子村、富水村が合併して足柄村ができる。**
- **昭和１５年　足柄村は町制を施行し、足柄町に。**
- **昭和１５年、小田原町、足柄町、大窪村、早川村などが合併、小田原市ができる。**
- **昭和４６年　「扇町」となる。**

＊井細田は２つに分けられている　下（しも）井細田（井細田一区）上（かみ）井細田（４３区）

＊天保１２年　井細田村の戸数９０

現在は井細田１区約３００戸、４３区約３５０戸　計６５０戸

井細田駅

大雄山線「井細田駅」

大正１０年（１９２１）ごろ、小田原・関本間を「乗合馬車」が走っていたという記録がある。主に乗客は大雄山最乗寺に行く人たちだった。

大正１２年（１９２３）鉄道工事開始。ところが、この年の９月に関東大震災があり工事中止。完成したのは大正１４年（１９２５）であった。

しかし、井細田駅はまだ、できていない。できたのは大正１５年になってからである。

この時の始発駅は広小路「魚藤」の裏あたりだったらしい。

小田急線は少し遅れ、昭和２年（１９２７）に開通した。

路線バスは小田原地方では遅い時期の開設。これは道幅 2.5 間で、道の半分を占めた穴部用水がネックだった。昭和２年高野自動車が小田原―飯泉―下曽我の路線を、昭和６年に足柄自動車が小田原―関本間に乗り合いバスを運行した。

＊小田原駅は大正９年に開業（国府津―小田原）。丹那トンネルができて、御殿場線経由から現在の路線になったのは、昭和９年のことである。

【写真】駐在所付近から撮影　中央が井細田駅、左の森は八幡神社　昭和31年

小田急踏切供養塔

小田急踏切の脇に、供養塔がある。いつもきれいな花が絶えない。

昭和２５年１２月２０日、小田原から久野に向かう一台のバスが小田急と衝突、死者７名の大事故であった。

その犠牲者の中に、小酒部利七さん、そして久野の駅伝の選手がいた。

このころ、暮れの１２月の「地区対抗の駅伝」は小田原市民が楽しみにしている行事。井細田旧道を走る地元選手を、家族総出で応援した。

そのなかで、久野チームは常に上位に入る強豪だった。この日、駅伝大会終え帰り道の選手を乗せた車が事故に遭った。

地区対抗華やかなときだったので、花形選手達のこの突然の死は、大きな反響を呼んだ。

≪小酒部利七≫

中久野の生まれ。昭和の初めのこと、小田原の町中と比べ、久野はバスも鉄道もなく取り残された状況であった。久野はかなり奥深い。利七は、ぜひバス路線を開通させたいと決意する。苦労の末、昭和６年、小田原～中久野の間４キロにバスが通った。「久野小酒部自動車」のバスはフォード１２人乗り。４キロ片道１０銭だったという。

昭和１５年、小酒部自動車は、駿豆鉄道（現伊豆箱根鉄道）にバス路線を譲った。まさに、そのバスで事故にあった。

八幡神社

創建は天正１９年（１８９１）という。秀吉軍に小田原城が屈した次の年。敗戦で荒廃した中での創建である。祭神は誉田別命（応神天皇）、名主の星野治郎右衛門が勧請、この地の字名が「若宮」であることから「若宮八幡」とも呼ばれている。

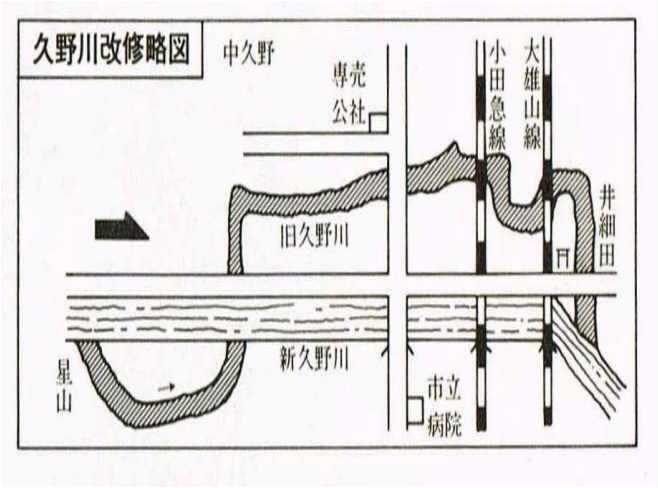
大正１２年の震災で旧神社は倒壊、再建されたのは昭和年。建築は拝殿、本殿を幣殿がつなぐ八幡造りで、屋根の曲線、太鼓橋の反り、大鳥居、石畳、石灯籠、狛犬等の配置もよく，周りの木々と相まって神々しいな雰囲気を醸し出す。

境内には土俵があり、祭礼の時には現在のように子供相撲だけでなく、大人の相撲も行われ近郷近在の村人が多数集まった。二宮金次郎も若い頃、この土俵に上がったという。

境内南に、稲荷、天神、明神、山神、第六天の祠がある。また、擬宝珠付きの八幡橋（太鼓橋）の下を流れる川は、旧久野川の名残である。鳥居は地元で石屋をやっていた府川源太郎の作。府川喜六郎家の分家筋にあたる。

＊太鼓橋脇の神社案内板を参考にした。しかし『新編相模風土記稿』にはこの社は「村民次郎右衛門」が勧請と記されている。案内板の名主星野家が、現在のどこの家と関係があるのか不明である。

＊山神：大山祇神をまつる
稲荷：農耕の神としての信仰から、商業神、屋敷神の信仰にまで拡大。
＊天神：菅原道真が祭神。学問の神とされている。
＊明神：神様のこと。神様を仏教の立場から言う言葉。
＊第六天：ご神体は、第六天魔王（他化自在天）で、身体壮健、道中安全を願う。



古川

旧久野川は図のように蛇行していた。藪に覆われた川で，少しの増水で氾濫を繰り返していたという。そして震災。耕地も大被害を受けた。

始めは壊れた堤防を直す程度の計画だった。しかし、湯川猪之三郎他は本格的改修計画の方向で、次の年の大正１３年１２月から工事を開始、翌年７月に完成した。

公的補助金が少なかったこと、そして河筋変更による私有土地の増減問題などで湯川氏他、苦労の末の完成だった。

現在、久野兎河原には、湯川猪(いの)之三郎の業績をたたえる「久野川改修の碑」がある。

・・・まず話は簡単なところから始まった。川が曲っているのは仕方がない。壊れた堤防は直し、補強工事をしたらどうか、というのである。私は強硬に反対した『そんな姑息な手段ではだめだ。この際思い切って川をまっすぐにし、大堤防を築いて百年の計とすべきだ』賛否両論があった。最後に湯川氏はこう言った。『・・そうなれば土地の関係者だけでも百人近くあり、きっと難しい問題が起こること請け合いだ。万難を排して強行しても、恨みこそ受けて、この事業は三十年たってみなければ人々に認められまい。それでもやるかね？』湯川氏の心中深く決するものがあった。（中略）

工事は半年を経て、実に見事に出来上がった。出来上がったはいいが、予想通り財政債務が山のように残って、日夜苦しんだ。よる夜中「おらが田の土地をへらした」と怒鳴り込まれたり，挙句の果ては、私腹を肥やしているとの蔭口に、泣いても泣ききれぬ思いであった。何しろ最後の債務は、昭和十四年ごろまで残っていたぐらいだから、湯川氏の苦心は一通りではなかった・・・

（郷土文化）　岸　達志

＊計画段階では震災復旧事業扱いで６割５分支援のはずが、実際には２割しか出なかったので、銀行から差し押さえにあったこともあった。債務がすべてなくなったのは１５年後のことである。

山王川下流の改修も同じ時期に行われ、こちらは昭和２年の完成。下流も同じような苦しみがあった。

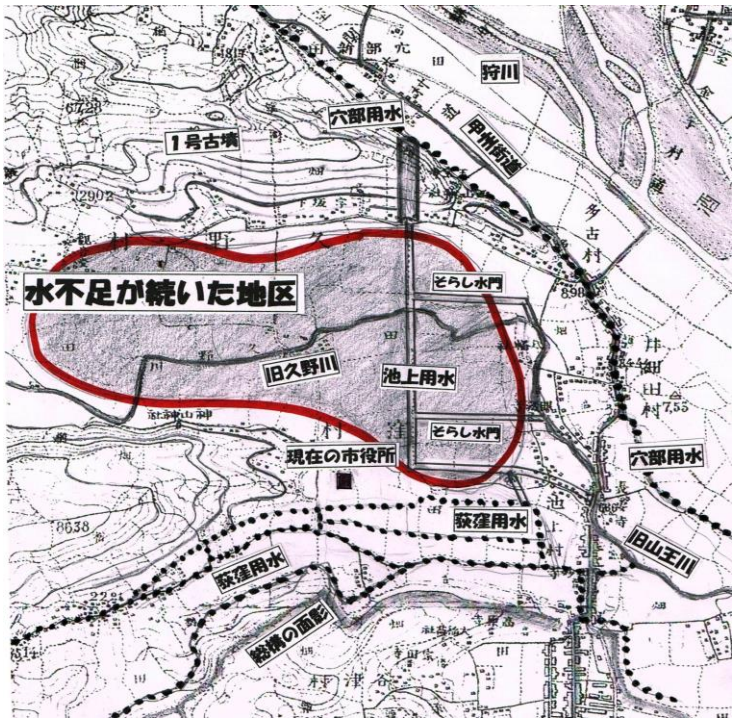
＊天保の相模風土記によると、川幅は４間～６間。大雨のたびに流路、川幅も変わっていたらしい。

＊河川改修にとき植えた桜は、見事な桜並木になった。病害で伐採したが、町田方面の下流にその面影が残っている。

≪池上用水≫

穴部用水の水を、多古の五百羅漢（玉宝寺）の上から、白山丘陵を坂下にトンネルで掘りぬき、この水を池上地区に引いた。この用水は途中、いわゆる「そらし水門」と呼ぶ増水時の落し口を２本作った。

一本は川端から左にそらし、井細田方面の水田も潤し八幡神社の裏で久野川に結び、もう一本は西耕地から左へ曲がる水路で、この二本目の「そらし水門」は今も眼蔵寺門前を流れる川となって久野川に注いでいる。



この工事の完成は嘉永６年（１８５３）４月。池上村の名主であった宮内太治兵衛が中心になって施工完成させた。当初、住民負担分は２０両の見積もりであったが、トンネル工事が難工事であったため４１両もかかってしまった。宮内太治兵衛は、そのうち１９両を拠出したという。

【写真】池上の神社にある「池上用水」完成記念の水神。そらし水門のそばにある。

道祖神

井細田には２か所にある。

昭和２５年ころまでは、道祖神（賽（さい）の神）の祭りは正月の子供の行事として定着していた。新年の「しめ飾り」「門松」そして「古いお札・だるま」などを燃やす火祭りで、一年間に起きる家や村の災難を背負った「もの」を道祖神の前で焼き尽くす祭りだという。また、その火で各家で色とりどりに作った、上新粉の団子を焼いて食べるとこの一年風邪をひかないとのことで、小正月１５日、道祖神の近辺は、大いににぎわった。この行事はすべて子供たちが主役で行われていた。

下のものは、大阪屋製粉と皆木家の間にあり、稲荷型の祠である。前の上原家（八百徳）横の道は、隣村の今井・町田につながる道。ここは分岐点なのである。［土地神社持ち］

上の道祖陣は、大川染物店の横にあり双体型である。

ここも、小田紡（現・富士フイルム）ができる以前は今井につながる重要な道であり、さらに井細田を上・下に分ける境界でもあった。

***道祖神：道路の悪霊を防いで旅人の安全を守る神。また、悪神・悪病の村への侵入を防ぐという意味合いから村堺や辻に造立された。井細田の2基も、今井、町田へつながる分岐近くに造られている。**

【写真】上の道祖神。双体型の道祖神は小田原から伊豆にかけて多いという。

塚二つ

天保のころの風土記によると、井細田村に「塚二つ、南西の二方にあり。共に高さ五尺」とある。

言い伝えでは大阪屋製粉前の小道の奥を『天神ノ森』と呼び、古い塚があったという。これが南の塚なのだろうか。もう一つ、谷津家と石塚酒店の細道の先に塚がある。これは西のものなのか？

詳しいことは不明である。

早野柏蔭

早野柏蔭

安政2年生まれの小田原藩士。藩校で砲術、算術、経書を学ぶ。特に算術の才は群を抜いていたという。明治11年(1878)上京、宮内省会計課に奉職。その後、『心学』に触れ心を動かされる。

『心学』は、江戸期の町人、石田梅岩によって唱えだされた、道徳心の向上を目指した活動で、早野はその心学修行を志す。

鎌倉円覚寺等にて研鑽をつみ、明治42年には有栖川妃殿下に、ご進講されるまでになったという。

大正時代になり官職を辞め、井細田自宅に戻ったが、心学の研修のための『塾』（参前舎）の塾長を頼まれ、月に何回かは上京し講話をされたという。小田原でも大蓮寺【文学館近く】や自宅で、親しく講話をされ、人々に教えを説いた。

本名元光、昭和11年、81歳で逝去。早野の慰霊祭は東京、練塀小学校で行われ、斉藤実（海軍大将・総理大臣）は「・・・心ある人士の斉しく敬服するとともに，故人の崇高なる人格とその教化的功績を・・・」と、早野の人物を称えた。

井細田の信号角の早野家が、元光の自宅である。

≪心学≫

江戸時代、神道・儒教・仏教の三教を融合して、その教えを平易な言葉と、通俗なたとえで説いた一種の民間教育。石田梅岩を祖とする、石門心学に始まる。

中戸川本家

江戸時代、名主を務める。池上村宮内家、府川村稲子家と並び、この地域の総元締め。今も立派な長屋門と長い築地塀に囲まれている。川を挟んで向かい側に、池上村の名主宮内家がある。

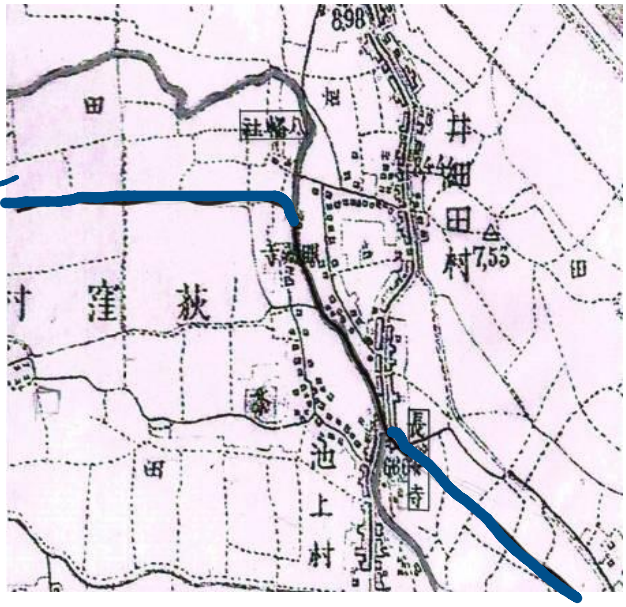
　長い歴史の家だが、火災にあい、資料を焼失。ただ、寛永（1630年代）に16代、彦右衛門が妙円寺に納めた鰐口だけは、残っている。

＊鰐口（わにぐち）神社仏閣の正面で綱を振り鳴らす、軒下の金具。寛永の年代と彦右衛門の名が読み取れる。

【写真】昭和30年代の長屋門　　昭和46年7月、255号新道はこの道路に沿ってできた

長安寺

明治１９年の地図に現久野川を記入（水色線）



　日蓮宗。ここには『桐大内蔵の墓』があり、市の文化財になっている。

　また二宮金次郎と幼なじみで、よき協力者だった久野の皆木政蔵の墓がある。

＊正式には日蓮宗池蓮山長安寺。開山は長享２年（１４８８）没の久遠威院日親上人。本尊は祖師・三宝諸尊である。祈祷用の番神堂には明正神毘沙門天と三十番神、鬼子母神が安置されている。墓地入口には痰咳大明神祠などがある。

現在、久野川の西側なのにこの長安寺は、川向うの井細田に属する。それは昔、寺の前を川が流れていて、位置としては、川の東側の井細田地区に属していた。寺の前を流れる小さな川はその名残である。新しい久野川筋ができたのは、大正時代の終わりになってからことである。

桐大内蔵

（きりおおくら）

後北条時代、大永３年（１５２３）氏綱の時代に北条氏の「舞大夫」として抱えられた。元禄の初め、娘が女舞大夫桐大内蔵の門人となる。以後、桐尾上を名乗り明治に至るまで女舞大夫として小田原城主の庇護を受けていた。舞台は寺町仙狐稲荷脇の自宅裏の敷地内に設けて興行した。

明治のころは、６代目尾上菊五郎や川上音二郎なども来たという。しかしこの桐座も明治４０年（１９０７）青物市場に転売、姿を消した。

桐座の座主大橋家の墓地に、女舞初代の桐大内蔵の墓がある。

【桐座　想像図（こより絵）　　元禄１６年の地震で亡くなった桐大内蔵の墓】

井細田大橋

明治の地図をよく見ると、橋の道はまっすぐではない。橋は直角にかかっている。道に角度がついていたことがわかる。風土記では橋の長さ９間、池上方面の道幅３間、橋を渡った井細田は 2.5 間【多古は２間】と記されている。

下を流れる川は、一般に橋から下を「山王川」上を「久野川」と呼ぶ。しかし、この付近の者は「山王」とも「久野」とも呼ばない。「井細田川」と呼びたいが、川向うの「池上」のこともあるので「大川」と呼んだ。この大川に架かる橋だから「大橋」。天保時代の新編相模国風土記稿では、橋の長さ９間と記されている。

万治 ３ 年（１６６０）関本の名主「下田隼人」は時の藩主稲葉正則の行列をこの橋の下に隠れ待ち、竹竿の先にはさんだ書状を突き出したという。この頃、城の修復などで税が重く、命をかけて農民の苦さを訴えたのである。

現在の橋は平成７年に完成。工期 15 カ月、その間全面通行禁止。総額 12 億円だったという。台風が来るたびに橋桁に山から流れる材木がかり、水があふれ悩んでいたが解消された。

下田隼人（しもだはやと）

関本の人で、代々名主総代を務めていた。

寛永９年（１６３２）稲葉正勝(まさかつ)が城主になると，城の修築や箱根関所の費用が、かさんだのに加え、大地震があり藩の財政は火の車だった。そんな時、藩主正勝は病死する。後を継いだのは、その子正則(まさのり)。正則は万治３年（１６６０）土地を測量して、石高を高めようとした。

ところが検地後、農民に今までの年貢のほかに、それまで税のかからなかった「麦」にまで税をかけた。

これでは農民が苦しくて生活できないと、皆の意見をまとめ、再三にわたり隼人たちは領主に訴えた。しかし、このことで、騒動の先頭に立つものは弾圧を受ける。行動を共にする者は一人去り二人去りする。

隼人はこれに屈せず、一身をなげうって嘆願しょうとその日を待った。藩主の稲葉正則が飯泉方面に公用で出かける情報を知り、井細田大橋の下に隠れじっと待ち、行列に飛び込み嘆願書を突きつけた。

当然のことながら、隼人の罪は許されず、小田原牢屋町で打ち首。万治３年１２月２３日のことであった。

遺骸は関本の竜福寺に葬られ、頌徳碑が建てられている。また村人たちは銀座通り脇の「錦織神社」にその霊を祀り、その勇気をたたえた。

今この神社は、大正３年に移されて谷津の大稲荷(だいなり)神社にある。

≪越訴(おっそ)について≫

小田原藩は、越訴の前年、万治２年までの３か年の実績を見て、年貢高を決め（定免(じょうめん)法という）、万位３年から実施の計画だった。隼人が訴えたのはまさに、実施される直前だった。上の解説では、「麦の税」が原因としたが、資料を調べると、畑に対する年貢が大きく増加している（金井島村の例３割増）ので、「畑方の年貢増」を訴えたのかもしれない。

越訴の効果だろうか、藩はこの年の年貢を修正、畑は反当り１５文引き（金井島村の例）の大幅譲歩を示した。

小田原藩主はこの時老中の役にあった。そのため役柄上「幕府の法令」は曲げず死罪とし、民意をくみ取る姿勢だけは示した。しかしこれもこの年だけ。また年貢高は元に戻った。内田哲夫の資料による

【写真】関本　龍福寺　頌徳碑

浅田鉄蔵

昔、棒の需要は多かった。捕り物用の六尺棒，突き棒、刺股から鍬、天秤棒まで。この棒をつくっていたのが高田家。井細田治療院の駐車場の位置である。

関本、飯泉方面の農民は小田原に、行くとき帰るときはこの道を通る。この農家の人たちにとって、向かいの古川「本桝屋金兵衛」の腕のいい鍛冶屋と組んで製作された、鎌・鍬・鋤は評判だった。高田家は、日本最後の敵討ちをなしとげたといわれる『浅田鉄蔵』の実家である。

【写真】敵を探して持ち歩いた肩掛け袋

浅田兄弟の敵討ち

事件は文政元年(1818)7月12日に起きた。浅田只助が、同僚の成瀧万助に口論のあげく斬られ、その翌日に死亡したのである。すぐ取り押さえられ入牢。ところが1年7か月後の2月に小田原の牢屋を脱牢、行方をくらませた。

亡くなった只助には2人の息子がいる。井細田、高田家から養子にもらった兄の鉄蔵21歳、弟の門次郎12歳の二人はすぐさま各地をまわり敵を探す旅に出る。

大阪から四国、九州へと捜し歩き4年目の春、文政7年(1828)の春，敵の万助が常陸の国、水戸の近くで煙草屋をやっていることを突き止める。敵の顔を知っている鉄蔵は、煙草屋の主人が「九兵衛」を名乗っているが、実は『万助』その者であることをたしかめた。そして二人は、夕食を食べている所に踏み込んだ。

事なし終えた二人は水戸藩主にもその功をたたえられ、手厚く江戸の小田原藩邸まで送り届けられた。小田原藩主大久保忠真は、兄弟を士分に取り立て50石を与えたという。敵討ちの本懐をとげたのは、父只助が斬られてから6年目のことであった。鉄蔵の墓は城山の高長寺にある。

⇒詳しくは、鈴木　好著『孝貞義鑑散策』に述べられている。

鈴木　好氏は長く城内高校で教鞭をとる。英文学専攻。井細田「鈴桶」が実家。

この本は、高田家の古文書「孝貞義鑑」を読み、論究を加えた名著。

≪事の原因≫

① お金が原因だった。２，３年前に小田原の町は火事が続いた。万助はそのあと始末の、長屋普請の買物方を命ぜられたらしい。ところが、その万助に不正なことがあったので，只助はこれに意見したという。

② 不義密通説。万助は足軽同僚の奥方と密通していたらしい。只助はそれを知って忠告、さらに奥方の夫にもそのことを伝えてしまった。夫は怒って不義の妻を、実家に帰したという。

③ 万助ご乱心。小田原市史では『取り調べの結果、ご乱心』が原因と記されてている。

＊その他の説もある

≪脱獄≫

事件から１年７か月後の文政３年２月、小田原牢屋町の牢（旧御幸座のところ）を２人で脱獄。一人は捕えられ死罪。万助は行方知れず。その５か月後敵討ちを願い出る。出発にあたり、藩からは１０両、そして親類、同僚などからの援助が７９両あった。

≪万助堂≫

敵討ちがあった常陸の国、祝町は、現在の大洗町磯浜。ここで万助は子供たちに、剣術を教え、手習いを教え、と評判は上々。近郷の人は、その後「万助堂」を名刹願入寺の境内に建てた。

「あの時刀さえあったら、むざむざとは切られなかっただろう」と、お堂に刀を供える人が今も絶えない。

穴部用水

この用水は嘉永年間(１８５０年代)狩川の穴部から水を取り入れ、多古丘陵の裾を掘り削り、トンネルで通水し、玉宝寺の前を通り、加藤兵太郎商店のあたりから、甲州街道（井細田旧道）に出る。

道路を川筋として通し、井細田の小澤布団店まえから今の富士フイルムの横を流れて、町田へ流れる農業用水であった。用水は道路の東側に道幅の半分ほどあったらしい

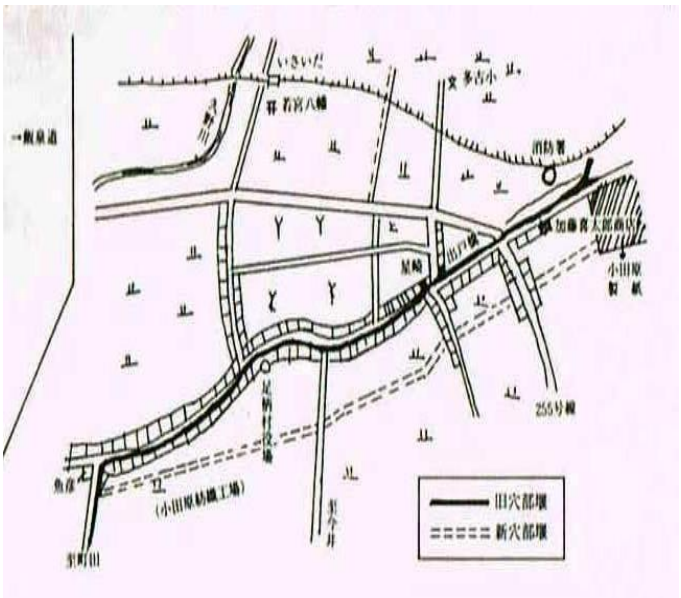
昭和９年ごろになって、道路を拡げるとともにこの、穴部用水も埋められた。用水は旧多古消防署から、道路の東側を通し旧ユアサ、富士フイルムの方へと迂回した新川(しんかわ)が作られた。

≪甲州街道≫

青物町から北に向かって伸びるこの街道。今では「井細田旧道」で通っているが、新道ができる前は「井細田大通り」と呼んだ。多古方面の人は「おうかん」とも言っていたという。

風土記では道幅 2.5 間と記されている。この穴部用水の移動のため道幅は５間の広さになり、文字通りの「大通り」になった。

【写真】魚彦側から新川を見る　昭和４２年撮影



妙円寺

日蓮宗。開基は中戸川彦左衛門【中戸川本家の祖先】である。山門横に「相模鬼子母神」の碑がたっているが、これは本堂に長髪の鬼子母神像が安置されていることによる。この像は、中山法華経寺鬼子母神の分身で、胎内に法華経が入っているという秘仏である。

＊鬼子母神(きしもじん)；　釈迦(しゃか)の時代、ひとりの『鬼女』が子供をつぎつぎと奪い食ったという。この女を釈迦は諭し、善人に変えた。以後、この『鬼女』はその土地の守護神になり、村人を守ったという。そのことから日本では、保育・安産の神として信仰されるようになった。

＊始めは真言宗で｛天授寺｝と呼ばれていた。後に日蓮宗に改める。しかし時の流れとともに、しばらくは無住の荒れ果てた寺だったが、井細田村の名主中戸川彦左衛門が、文禄２年（１５９３）に「妙円寺」として再興したという。中興開山は日延上人である。

＊中戸川家はそれまで小田原の「妙経寺」の檀家だったが、「妙円寺」檀家に変更。そのため井細田には本家寄進の妙経寺の土地がある。

＊本尊は室町中期のもの。市の調査で、日蓮像では県下で４番目の古物だと判明。

井細田の片法華（かたほっけ）

昔の井細田の村は、片側に街並みが並び、片方は田圃が広がっていたらしい。表紙の地図を見ると、たしかに八幡神社と地蔵を結ぶ道も、元「立花茶店」から「和田屋」に抜ける道も、片側に家並みが続く。大通り筋の旧家のほとんどは、道の西側である。そして、井細田にある寺院は三寺、何処も法華宗（日蓮宗）。井細田に古くから住んでいる家は法華宗が多い。

そこで「井細田は片方だけが家並みで、法華宗が多い」ということを昔の近郷の人は「井細田の片、法華」といったという。郵便も「片町」で届いた。

妙円寺住職(談)

足下地蔵尊

本尊は２２㎝の半跏趺坐（片足を、あぐらにくんで、もう一つの足は伸ばす姿、この足を下に伸ばすことから、足下げ地蔵という）で、言い伝えでは作者は、運慶。像には慶安元年(１６４８)作という鎌倉仏師の墨書がある。

この地蔵の霊験あらたかなることを知った、時の城主稲葉正則は、同型の大型像を作って、この小さな本尊を胎内に収めたという

明治３４年(１９０１)近郷近在の信徒の浄財によって、現在の地蔵堂を再建。堂内には明治３６年の大念仏講の額、明治３３年の絵馬、はなどり地蔵の念仏画が掛けられている。境内の入り口には唯念の大名号塔がたつ。昭和の中ごろまで南の角に、火の見櫓もあった。

また、ここからくみ上げる「延命水」は酒匂川水系ではなく、箱根山水系のもののようで、小田原の名水として汲みに来るものが多い。

地蔵祭りは毎年、１月２４日、８月２４日。扇町商工会、八幡神社氏子会の尽力で井細田地区手づくりの、地域に密着した祭典として、老若男女で賑わっている。正式には法界山西光寺と号する。

堂の右に立つ子育て地蔵は、関東大震災の時「小田紡の工場」でなくなった人の供養地蔵。跡地の真ん中にあったが移動し、子育て地蔵様として生まれ変わる。

＊小田紡：富士フイルムの出来る前にあった工場。小田原紡織。

＊唯念（ゆいねん）：浄土宗僧侶。静岡の小山に念仏堂をひらく。伊豆、相模地方の各地を回り、特異な書体でかかれた名号碑をのこす。
明治 13 年 8 月 23 日死去。90 歳。肥後（熊本県）出身。

【写真】府川商店前で、その家族を写したもの。手前に穴部用水が見える。また、映っている大きな藤の木は、その後井細田地蔵に移植した。藤の木の右に用水をまたぐ木橋があるように見える

「はなどり地蔵」物語

村の茂左衛門さんは、地蔵さんの裏に自分の田圃があったそうな。ある時、手伝いの小僧を連れて代掻き【しろかき】していたら、小僧が急に「腹がいてえ」と言い出したと。「それじゃ仕方ねえ」とお地蔵さんのお堂につれてって、「おい、しばらく休んでろ！」と田圃に戻った。と、何処からか、ちっちゃな小僧がチョコチョコ出てきて、「俺がはなどりをすんべえ」と言って、とてもうまく馬のはなどりをしただと。

田圃の代掻きが全部終え、茂左衛門さんが、ひとことお礼を言うや、そのちっちゃな小僧、ヒョイどこかに消えてしまった・・・

「そうだ、お堂に置いてきた小僧はどうしたべ？」と地蔵さんに行くと、小僧はすっかり腹痛が治り、ピンピンしていた。その時、茂左衛門さんは、泥の足跡があるのに気が付いた。小さな足跡は、お堂の上がり口から、お堂の中へと続き、お地蔵さんのところまで。よく見ると、お地蔵さんの足も泥だらけだったと。

茂左衛門さんは「こりゃ、さっき馬のはなどりをして代掻きしてくれた小僧さんは、このお地蔵さんに違いねえ」「びっくりこいた！こりゃ、ありがてえ地蔵さんだ」と何回も、泥足の地蔵さんに頭を下げたと・・・・

それからこの井細田の地蔵様を「はなどり地蔵」とよぶようになったそうな。

代掻き風景
田植の前に、田んぼに水を入れ、土を細かくし水とかき混ぜる作業。牛や馬を使ってやることが多かった。「はなどり」は牛馬の鼻の先の棒で、その動きをコントロールする。写真の笠をかぶっている人がその役。

小田原合戦・沢井雄重の陣

天正１８年の小田原合戦の時、多古白山台地には北畠信雄（織田信雄）が陣取ったと考えられている。そして井細田は、織田信雄家臣の沢井雄重が陣を張ったと推定する人もいる。ではどこか？

微高地が陣場となることが多いので、表紙の明治の地図 8.44 のあたりか、または道を超えて、地盤が湿地でない正蓮寺の付近か？

沢井　雄重（さわい　かつしげ、生年不詳 ）は、安土桃山時代から江戸時代初期にかけての武将。初名、政長、吉長（のちに信雄の諱を受け雄重と名乗る）。織田信長に仕え、永禄 10 年（1567 年）に稲葉山城攻めで功を挙げた。永禄 12 年、北畠具教の養嗣子となった茶筅丸（のちの織田信雄）の傅役となり父の所領と合わせて 4400 貫文を治めた。天正 10 年（1582 年）14,500 貫をもって黒田城に入った。天正 12 年（1584 年）の小牧の役には黒田城を死守。慶長 13 年（1608 年）死去した。　　ウィキペディア

秀吉と北条の戦いで・・・

秀吉の小田原攻めは天正１８年（１５９０）４月のことであった。これに備えて、北条は久野川を曲流させ、敵兵が飛び越せない幅の掘割に改修したという。岸辺のボサの刈り取りを禁じ、多古の丘から【織田信雄が陣を敷いていた】攻め下る敵をおびき寄せ、ボサの中に配置した伏兵が一斉射撃でこれを撃退する作戦をとった。この接近戦はすさまじく、「西の鈴木家」【現・西丸ストア】はこの戦の兵火で焼失したと伝えられている。

小田原史談１１４号　　星野幸一氏の資料による

恵比寿講

祠は横溝篩店の脇の小道を入った右側にある。祠の正面には『夷講中』（えびす・こうちゅう）』、脇に『明和７年１０月』（１７７０）の文字がはっきり見える。

昭和２０年代、１１月２０日は『恵比寿講』の日とし、井細田の子供たちにみかんやお菓子が配られ、この小道は近所の人や子供たちで、あふれかえった。

祠の前の「第一公園」は足柄村時代の役所の跡地である。小田原市合併後も足柄支所として役所があった。

【写真】村田家脇にある恵比寿講の祠

正蓮寺

日蓮宗。ここには「きのえねさま」と呼ばれる大黒天像がありその像は、日蓮上人が作ったものだとの言い伝えられている。元禄・享保の頃は大黒天の信仰が盛んで、「相模大黒天」ともいわれ、隆盛だったという。

関東大震災で本堂が全焼したが、大黒天像は足柄銀行に保管中で難を逃れた。以後、火伏せ・除災・開運の大黒天として信仰され、甲子(きのえね)祭が行われた。

参道に「大黒天」と刻んだ標石が立っている。

＊ 現幸山正蓮寺。開基は日信上人。日信は小田原の豪商伊沢屋利兵衛の応援を得て、ここに一堂を建てたという。

＊ 大黒天；七福神の一つ。日本の大国主命と習合して、「えびす」とともに台所などに祀られる。

二川(ふたがわ)

明治２２年に、井細田村、多古村、今井村を合わせて、二川村が誕生する。酒匂、久野川の２本の川に囲まれている３村であることから、二川となったという。

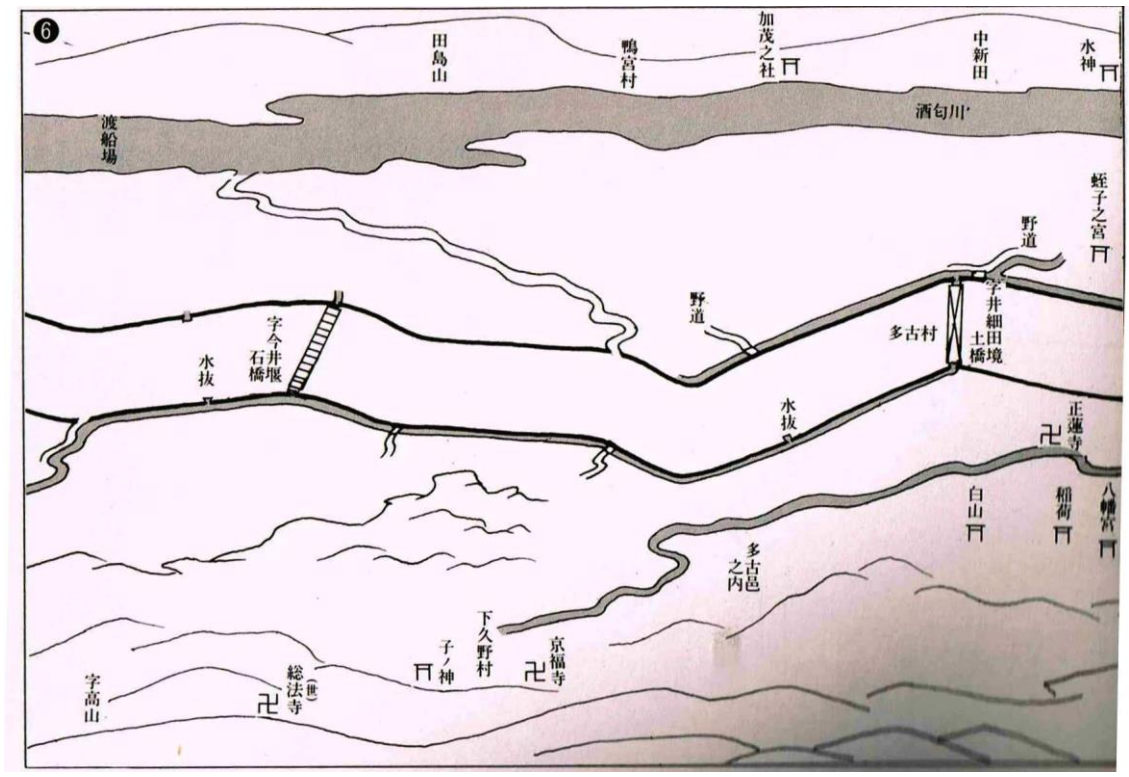
現在「二川」は自治会名としてのみ使われ、井細田、多古を合わせた地区を表している。

＊小田原の自治会を区分して番号を付けた。ここ井細田は古くから上・下に分かれていて下井細田を４２区，上井細田を４３区とした。ところがこの名前を自由に変えていいということから、４２区は井細田一区を名乗る。４３区は井細田二区ではなく４３区そのままの名前になっている。その両区の境は地蔵尊と八幡神社を結ぶ道路である。

＊地区名の違いについては、４２は「死に」に通じるので変更を希望し、４３は「資産」に通じるなどで現状維持を望むなど、両区の区名変更の話し合いに食い違いがあったらしい。

＊井細田の小字名には、北の里、丸島、陣が道、瀬戸河原、などがあった。「陣が道」は大橋から魚彦までの東側をいう。小田原攻撃の陣の「頭」（とう）だったからともいわれる。

【写真】井細田大橋にあるモニュメント。「扇」に「井」のマーク、扇町と井細田をイメージしたものであろう。



文政３年の絵図

『矢倉沢通見取絵図』が文化 3 年（１８０６）に幕府道中奉行所によって作成された。

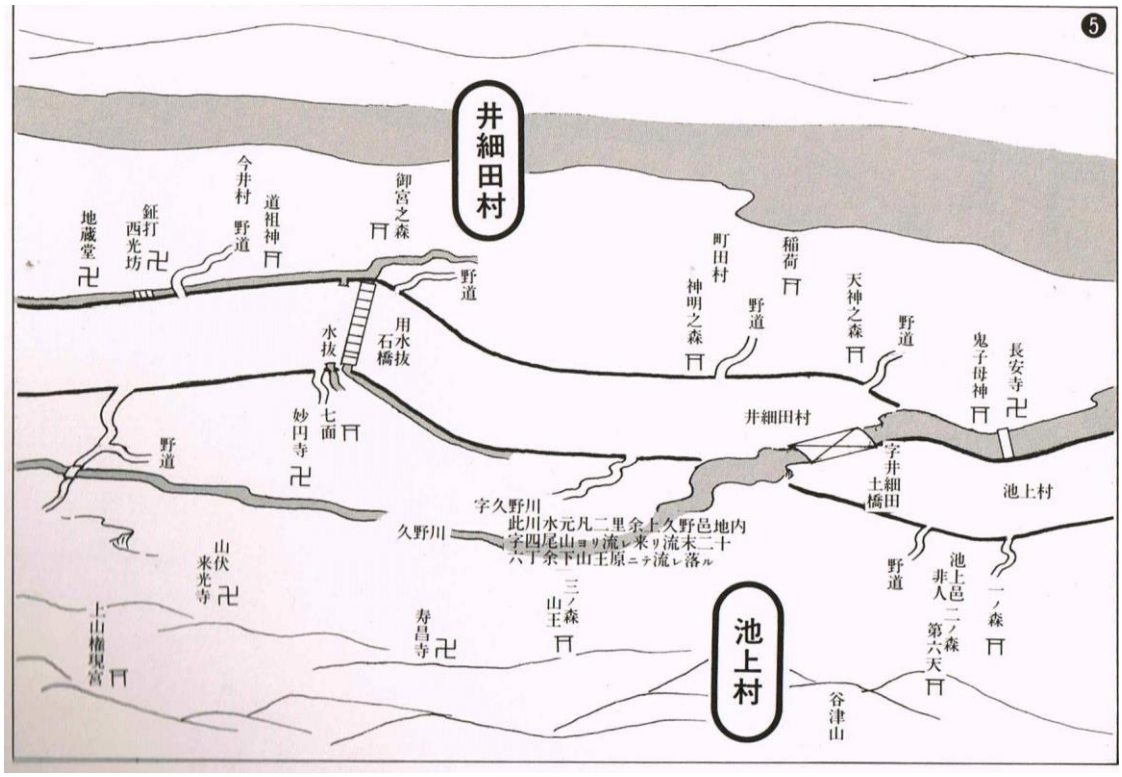
それによれば、井細田、多古の境には土橋がかかり用水が西側から東側に移っている。この位置はどこであろうか？　セブンの前あたりであろうか判明しない。

穴部用水が完成（1850 年ごろ）した後の明治の地図を見ると、用水が西から東に移るのは、もっと多古よりの押田時計店目あたりのようにも思える。

もう一つ注目すべきは八幡神社の位置。左の絵図（原画）をよく見ると地蔵尊から伸びた道の南側にある。表紙の明治の地図では地蔵尊と神社は一直線。そして現在は道の北側。どう解釈したらいいものか？

久野川改修と共に、道路を南側に移動し、社殿も移動したのではないだろうか？

街並みを見ると、地蔵尊を中心に、神社に向かう道、そして正蓮寺前の通り（片側だけ）が賑わっている。ここは井細田で一番の集落である。



もう一枚の絵図（原画）を見てみよう。

それによれば、「長安寺」は川の南側にあるのがはっきり分かる。大通りの端の水路は、元の「魚彦」から町田方面に水を流し、道の反対側にも分水している。用水抜き」は溢れる水への対策であろうか。石橋がしっかりかかっている。

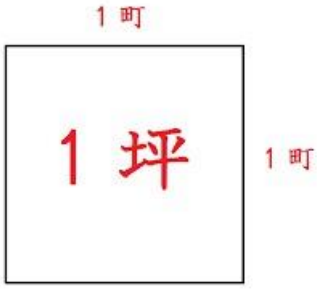
道の東側を見てみる。『天神之森』『神明之森』『御宮之森』が見える。『御宮之森』は今井の森。しかし「天神」「神明」の森は形も残っていない。大橋から本多家にかけては家が続き、「千代の屋」角からの横道にびっしり家が並ぶ。

「神明の森」は富士フイルムテニス場の脇の字名。府川喜六郎が自費で建てた石碑がある

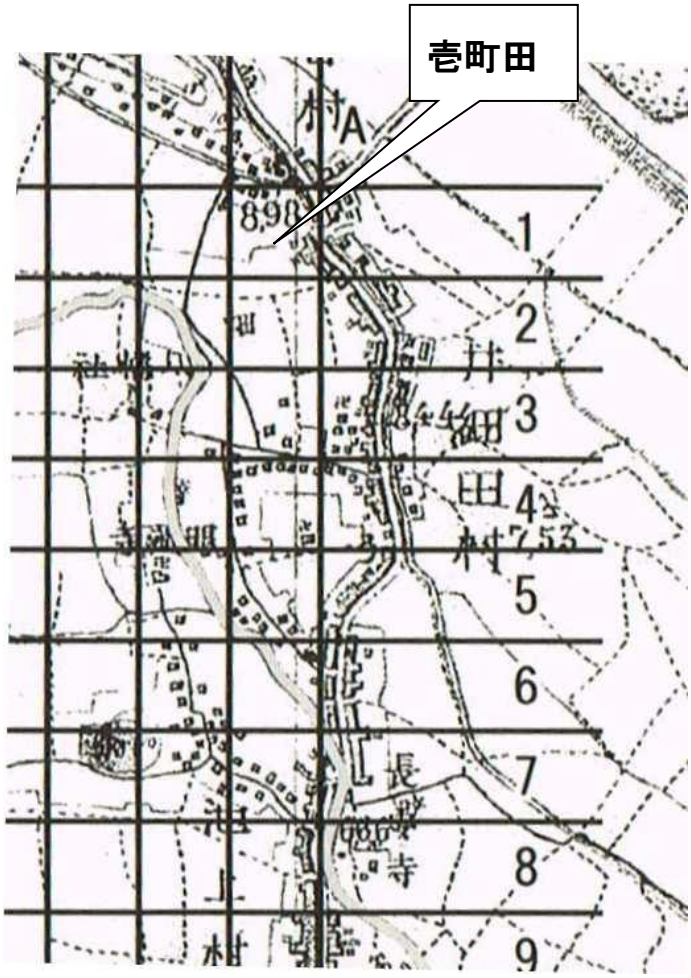
条里制

奈良・平安時代の話しです。井細田、多古の地に条里制が施行されていたというのです。

下の図を見てください。よくよく土地を調べてみると、久野川流域は、碁盤の目のような区割りになっています。このマス目の一辺は１町、約１０９ｍです。



そこで、特に顕著に区画が分かれている、芦子小学校と小田急の間の区画を調べてみますと。一辺が１０９メートル（１町）の正方形の土地（１坪）が並んでいました。



やはり、条里制はここにあったのでしょうか？

井細田の伊勢万商店、駐在、多古歩道橋、飯泉入口バス停あたりをむすぶ四角形の土地の字名を、『壱町田』といいます。

これは、碁盤の目の区画、条里制の１丁目１番地を表します。つまり碁盤の目の、基本になる位置を表していると言えます。

今から１５００年も前の話しです。

【図】多古の柳川明夫さんが、小田原市史の図を参考に作ったもの。この図をさらに修正したものも発表している。

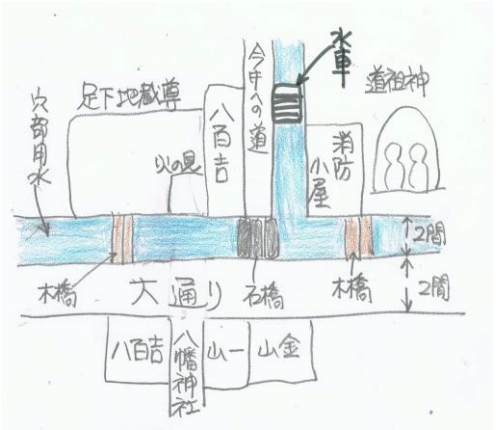
条里制（じょうりせい）は・・・・・・・・

日本において、古代から中世後期にかけて行われた土地区画（管理）制度である。ある範囲の土地を約 109m 間隔で直角に交わる平行線（方格線）により正方形に区分するという特徴がある。

ウィキペディア

水車

水車がいくつか回っていた。電動機が普及する前は、精米、製粉などに広く使われていた。しかし、この水車を設置し、維持、管理するには相当な費用が掛かった。井細田村では中戸川本家裏の大川沿いにひとつ、地蔵横・消防小屋の後ろにひとつあったことがわかっている。一軒の家で経営するのは大変なので、消防小屋後ろの水車は本家など７軒での共同所有だったらしい。

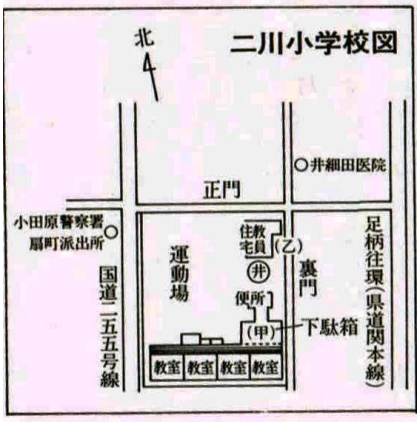


【図】古老より、聞き書き

【写真】門松理容店の横に「小田原市役所足柄支所」の柱が見える　昭和42年7月撮影

足柄小学校

明治６年５月「成美館」の校名で、池上村眼蔵寺（がみむらげんぞうじ）を仮校舎に開校した【荻窪・谷津・中島・町田・井細田・多古が学区】。その後、児童の増加により明治９年「多古学校」を、地元有志の協力で設立した。



さらに、明治２９年現在の白山中学校の場所に尋常高等多古小学校が村民千人の、３２８０円の寄付によって新築、富水、多古、井細田、芦子の児童が通った。

明治３５年、下学年を分離し、尋常二川小学校を伊勢万商店の脇の道を入った所に設置した。新設のこの学校の校長となったのは石塚政治校長で、実直な学校経営で、児童は勿論のこと、村民にも心安く接し指導を惜しまなかった。八幡神社の境内に「石塚政治頌徳碑」がある。

その後「尋常高等多古小学校」は「足柄尋常高等小学校」「足柄国民学校」と名前を変え、昭和２２年(１９４７)「足柄小学校」【中学は，第三中学校となる】となった。

この足柄小学校が、第三中学校【現白山中の位置】から、現在のところに移転したのは昭和２８年月のことであった。

【写真】芦子小学校の方向から足柄小学校を見る。富士見橋は昭和27年頃完成。昭和42年3月撮影

足柄保育園

以前は、宮越仏壇店横の伊豆銀行跡地にあったが、今のところに移転した。現在正蓮寺の土地に設立しているが、経営の主体は寺とは別の「法人」で独自の体制をとっている。

井細田の工場

富士フイルム

大正 6 年(1917)「小田原紡紡織」がこの土地にできた。小田原地方初めての本格的な近代工場で、実質的な運営責任者は益田信世(その後昭和15 年、小田原市初代の市長になった)であった。

小田原紡織工場

ところが大正１２年の大震災で工場の建物が全壊、男女工員 134 人が圧死する惨事に、再起不能となってしまった。

この跡地に富士写真フイルムができたのは、昭和 13 年（１９３８）であった。始めは南足柄にある足柄工場の原料部門の役割を果たしていたが、次第に独自の生産体制で、昭和１５年には光学レンズ工場が稼働、その後ビデオテープ、カセットテープに生産内容が変わる。

【写真】小田紡はレンガ造りであったため、多くの死者が出た。　大正１２年

Amazon

Amazon の倉庫群は平成 26 年に完成、操業を始めている。以前ここに「ユアサ電池工場」があった。

昭和１６年(１９４１)最初は「湯浅電池蓄電器工場」として発足、海軍の潜水艦用電池極板を生産していた。昭和２０年８月１３日、終戦２日前に、軍需工場を狙った米軍機の爆弾１４発により構内の１３名が亡くなっている。

工場撤退の跡地から、基準以上の汚染土が見つかり大きな問題となったこともある。

太平洋戦争の被害は、ここ「ユアサ」だけではなかった。

元小田原消防北分署近くに防空壕が作られていた。この日の米軍機からの激しい爆撃を避けるため、近所の人、通行人は、この防空壕にあわてて逃げ込んだ。ところが、米軍機グラマンからの爆弾はこの壕の近くで炸裂。爆風で壕が崩れ三家族１１人と通行人２人が不運にも圧死した。

この地に加藤兵太郎商店の加藤栄造氏は昭和４４年、身代わり地蔵を建てた。

妙円寺も同じ8月１３日に、米軍の流れ弾を受け本堂の屋根が飛ばされた。

【写真】防火演習、男子は徴兵や徴用に駆り出され、女性の姿が多い。別生家前
昭和２０年ころ

井細田商店街

文政１３年　小田原商人、井細田の商人を訴える！

井細田、多古等の小商の商品は、小田原城下の商店から仕入れ販売する決まりになっていた。ここ甲州街道沿いは小商いが盛んに繁盛し城下商店を脅かす程だったという。しかし、商品を見ると城下以外から仕入れているものが多いのが発覚。小田原藩の役人とつながりのある小田原宿の商人たちは，藩に迫った。藩はそれを受け、さっそく村々へ回状を回し、以前からのしきたりを守るように命じた。特に荻窪、井細田、池上、多古には細かい指示が下された。

その例のいくつかは・・・

・まんじゅう、うどん、豆腐などの原料は、直接村々から仕入れず、小田原の商店より買うべし

・呉服、瀬戸物、足袋、提灯などは売ってはならぬ。わらじは村内だけで売るのは許可する

何でも間に合う商店街

明治大正のころが最盛期であった。ここで買い物が間に合わなければ、上郡、成田、曽我の客は小田原町に足を延ばす。これを食い止めるには、客の要望に応えなければならない。そんな思いが満ち満ちていたのだろう。

こんなエピソードがある。

大正年間、井細田にひな人形の店がない。「節句の客を小田原にとられてしまっては、ほかの商売にも影響する」というので、有志共同で人形の店を開設した。妙円寺入口角の大川瀬戸物店（現存せず）がそれである。『何でもそろう井細田』がキャッチフレーズだった。

【写真】

大通りから妙円寺方向を見る。右が大川瀬戸物店。近所では「ちゃわんや」と呼んだ。ここに時期によりお雛様が並んだ。　　左は小沢ふとん屋

老舗	天明	本桝谷金兵衛（古川）	香具師元締め　野鍛冶
	寛政	大阪屋（石川）	八百屋、足袋屋、呉服屋
	寛政	山金（山口）	紺屋、油屋、化粧品製造販売
	天保	青野屋（星野）	菓子

≪老舗の始業　野頼徳治の調査による≫

酒造『日野屋』

現在の西湘病院のところに、酒蔵の山中兵右衛門商店があった。以前の久野川は、きれいな水で、生活用水としても使っていた。この久野川の伏流水を使って『長鶴』という辛口の地酒を昭和４０年初めまで作っていた。

天保８年（１７８８）の記録では、酒造高６００石で、小田原では最大の酒蔵だったという。

大坂屋製粉

明治２０年代、初代徳之助が、本家裏の久野川の流れで水車を回し、麦・ソバ・大豆などの製粉したのがはじまり。はじめは「菓子種店」。湯河原名産「きび餅」をまぶす、きな粉がよく売れた。昭和の初め頃、松原神社が節分に撒かれた豆を集め「きな粉に」と持ってきたことがあったという。「製粉店」となってからも、熱海、箱根などの土産用製菓原料の注文が多かった。

高田棒屋

昔、棒の需要は多かった。捕り物用の六尺棒，突き棒、刺股から鍬、天秤棒まで。この棒をつくっていたのが高田家。井細田治療院の駐車場の位置である。

関本、飯泉方面の農民は小田原に、行くとき帰るときはこの道を通る。この農家の人たちにとって、向かいの古川「本桝屋金兵衛」の腕のいい鍛冶屋と組んで製作された、鎌・鍬・鋤は評判だった。高田家は、日本最後の敵討ちをなしとげたといわれる『浅田鉄蔵』の実家である。

本多時計店

先祖は小田原藩士。古くからの大久保の家臣だったと思われる。石高１５０石で幕末を迎える。安政元年の黒船来航の折りに、本多直記が出陣している。明治維新後、武士から転身、転居、「時計職」を始めたという。現在は貴金属を扱う「ジュテームホンダ」店として、繁盛している。

【写真】左が皆木煎餅店、立花商店、右手前は大阪屋製粉工場、中島自転車店も見える。

昭和44年撮影

白金屋

通称「ミナギ煎餅(せんべい)屋」。昭和２年にせんべい製造業として竹の花に開業。昭和５年に井細田に移転、良質のせんべいは好評だった。特に「あられ」は人気の一品だった。

立花茶店

現在の鮮魚店「千代のや」の位置に、手広く茶の問屋・販売をしていた立花商店があった。静岡の吉原とのつながりがあり、産直商売の走りだった。

山口菓子店

山口辰治が創業。昭和３０年代になって辰治氏が小田原提灯の形をした『ちょうちん最中』を発売。小田原のおみやげとして人気を博し、以後、錦通りや２５５号新道にも店舗を構え発展を示した。

府川商店

古くから、駄菓子屋、煙草屋として続く。店は小さいが「井細田のタバコ屋」で昔も今も、地元では通じる。報徳の実践者の府川万衛門は、ここの先祖である。

府川万右衛門

こんな物語がある。

「千代に住む大工の万右衛門は、ある日井細田に材木の買い出しにきた。するとある家の老婆が子供に置き去られ，ひとり駄菓子屋をして細々暮らしをしていた。この貧しく、寂しそうな姿を見て万衛門は同情し、この家の養子になることを決心する。」

その養子になった家が、この「府川商店」である。

その後、たまたま福山瀧助【報徳の指導者】の話を聞き同感。以後報徳の実践者としての活動をする。明治２４年の井細田５,６０軒の大火の時は、先頭に立ち復興に勤めた。口下手であったが，乞われて、土沢、比奈窪、名古木へ出向いて話をしたという。

明治３４年、足下げ地蔵建設の棟梁も務めた。天保９年生まれ、昭和２年没。墓は潮音寺にある。

＊万右衛門の実家は、千代村三島神社近くの隅田家。婿に出るとき実家で持参金を用意してくれたが、断って府川家に来たという。

【写真】富士フイルム正門、右は辻村製麺、栢沼商店、府川たばこ店と続く。昭和44年

大川染物店

ほぼ１００年の歴史を持つ染めの老舗。現在は５代目。
ノレン、旗、幕等の注文を受ける。近郷の祭礼に立てる登り旗は、みなここ大川の製作。

山金

現在の山口博司さんが７代目。享保年間（１７２７年）に井細田に住むようになった。

初代は紺屋を営む。３代目の時、ここの仕事人、熊次郎が向かいの土地で紺屋を引き継ぐ（これが後の大川染物店である）４代目になって小間物屋、このころ金七の名前をとって、ヤマキンと命名したと思われる。

化粧品を始めたのは５代目。整髪料を独自に作り山北、箱根、下田まで販売網は広がった。現在は７代目の山口博司。『白蘭香油』を作って販売もした。

田浦湯

銭湯。昭和２年開業、３代、88 年続いた。小田原には２４件の銭湯があったが、最後に残ったのは中町の「中島湯」と、『田浦湯』の２軒だけになった。ここの湯は「小銭湯の珠玉」とも評され、開店夕方４時には行列ができた。床の亀甲タイル、垂直押しカラン等、レアなインテリアにあふれていた。湯を焚くため、隣の広小路に何軒もあった材木屋から出る「おがくず」を利用していた。

田浦湯と長安寺参道の間に「小野晴運送」が以前あった。富士フイルムの荷物を扱い大いに繁盛した。井細田八幡神社の子ども神輿は，このころ寄付されたもの。瀬戸勝之助の作という。

＊井細田にはかってもう一つ『鈴の湯』もあった

瀬戸折箱店

３代１００年にわたって、折り箱業を続けた。折箱の接着は「米を練ったもの」を使った。プラスチックがない時代だったので、駅弁、おみやげ用かまぼこ、祝いもの等、需要は多かった。

しかし､時代の流れで折箱はプラスチック､ハッポウスチロールにとってかわり、需要が減り廃業した。

神奈川屋農機具店

広小路の東側に「小田原青果食品市場」があった。

関本方面から、そして飯泉橋を渡って成田、桑原、下曽我方面から野菜農家が、井細田の道を通る。神奈川屋ははじめ篩(ふるい)屋だったが、人の流れを見て農機具屋に変わった。それから横溝良平で３代目。屋号「神奈川」は出身の「神奈川宿」【横浜市神奈川区】に由来する。

佐宗菓子店

Amazon の前のお菓子屋さん。４代目続く職人の店。手づくりの「桜餅」､「柏餅」、などが評判の一品。

飯泉観音の縁日には、この日だけ特別に「ひめこ餅」を作っている。これは上新粉と、もち米の皮で、小豆のこし餡を包み込んだもので今でも１０００個は売れる名物。

横溝篩（ふるい）店

現在で５代目。今神奈川県内で「篩」を作っているのはここと、もう一軒だけ。注文生産。どんな求めにも応じる職人の技が光る。

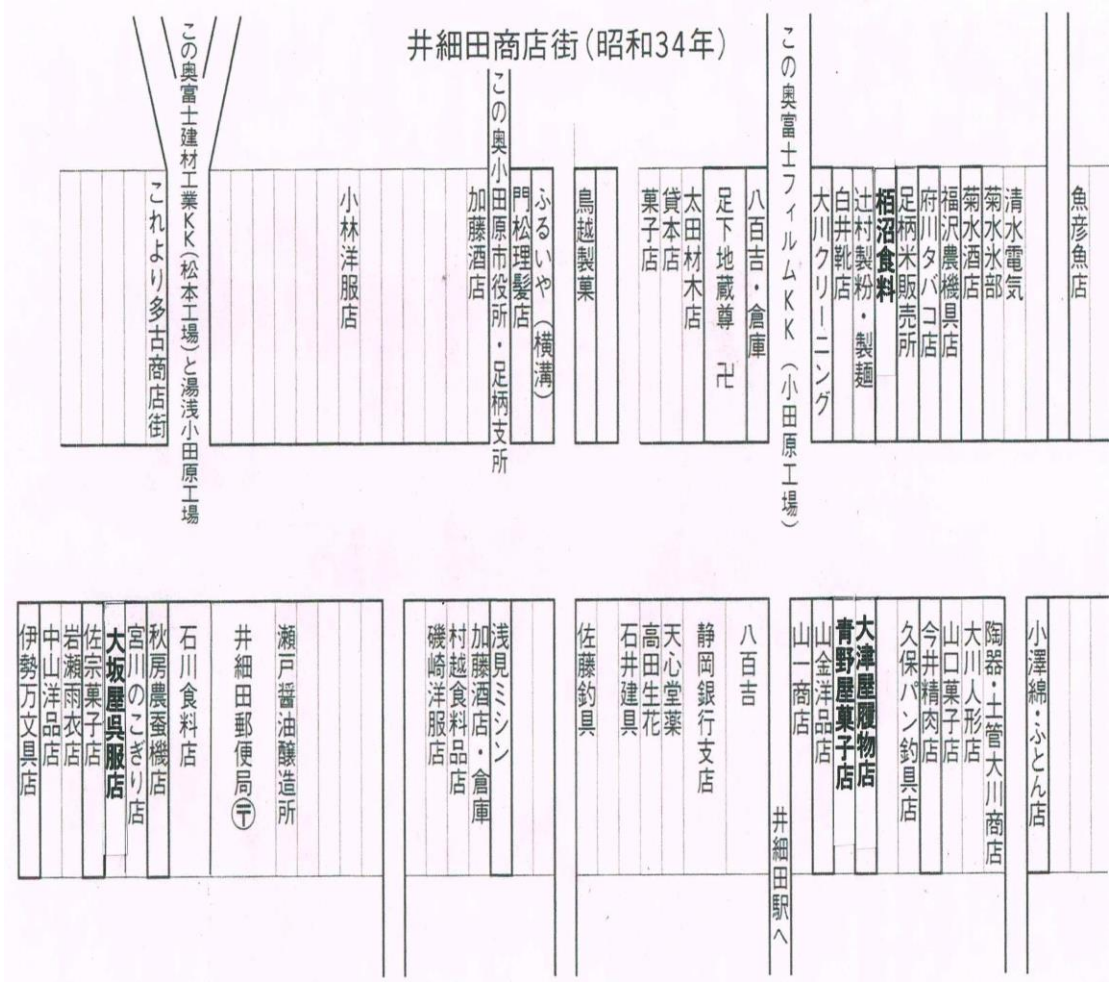
造るものも手作りなら、使う道具も自分に合った手作り。「せいろ」の注文が多い。

昔は、近所の子供たちの要望に応えて「もじり」「びって」などの魚とり道具を作り、子供の集まる場所の一つだった。

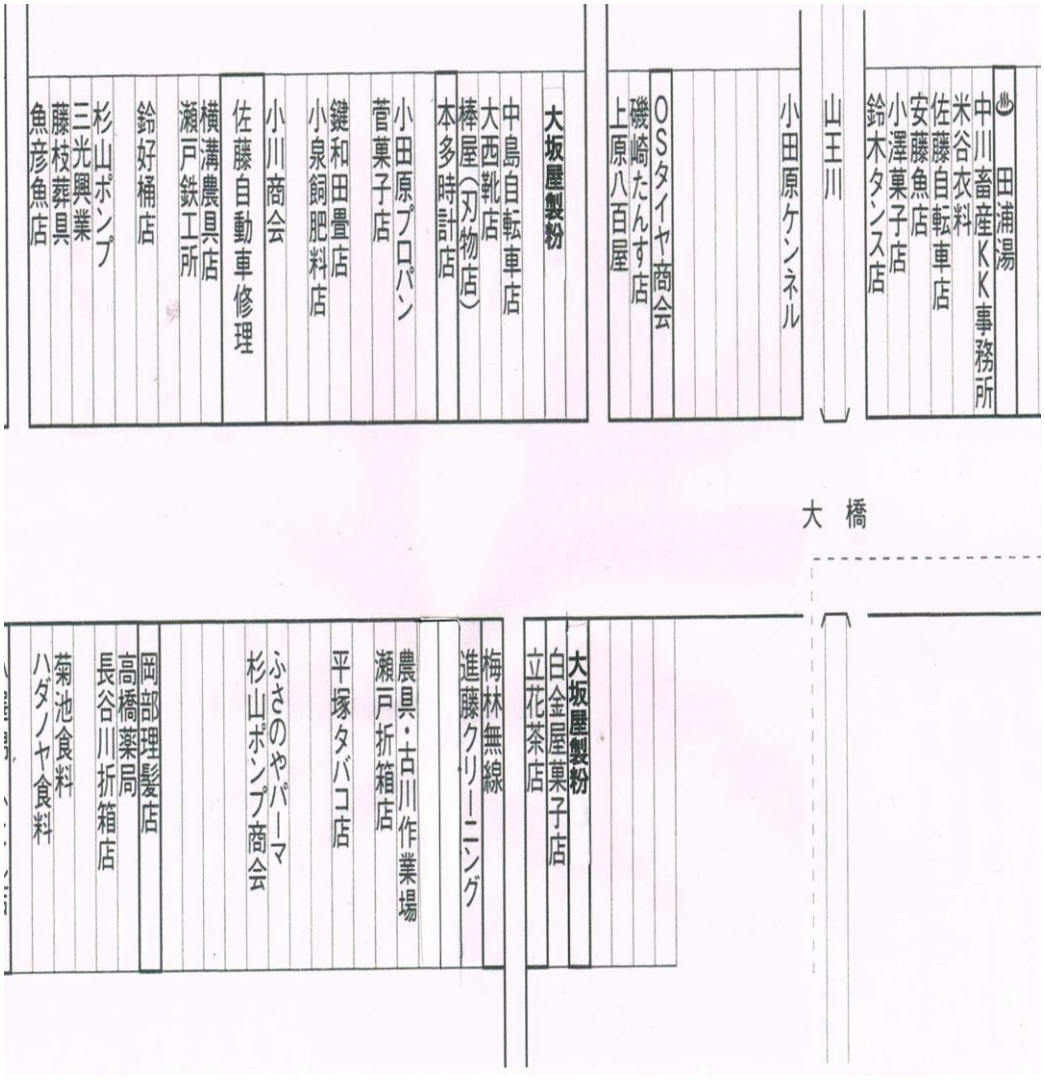
大坂屋呉服店

井細田きっての老舗。創業は寛政までさかのぼる。大坂屋製粉（鈴木)、大坂屋足袋店（別生）は、そののれん分けされた店。当主は代々村の役職を務める。俳句誌『音』を昭和３７年に創刊し、小田原俳句協会をリードした石川冬城（敬造）は呉服店最後の当主。

【写真】大阪屋呉服店、宮川のこぎり屋、秋房農機具店と続く。向い側はユアサ。
昭和４２年撮影



【写真】岡部床屋から見る。鈴木桶屋、瀬戸鉄工所、カーブの角が神奈川屋。
昭和４２年撮影



小田原史談会調査

井細田関係　年表

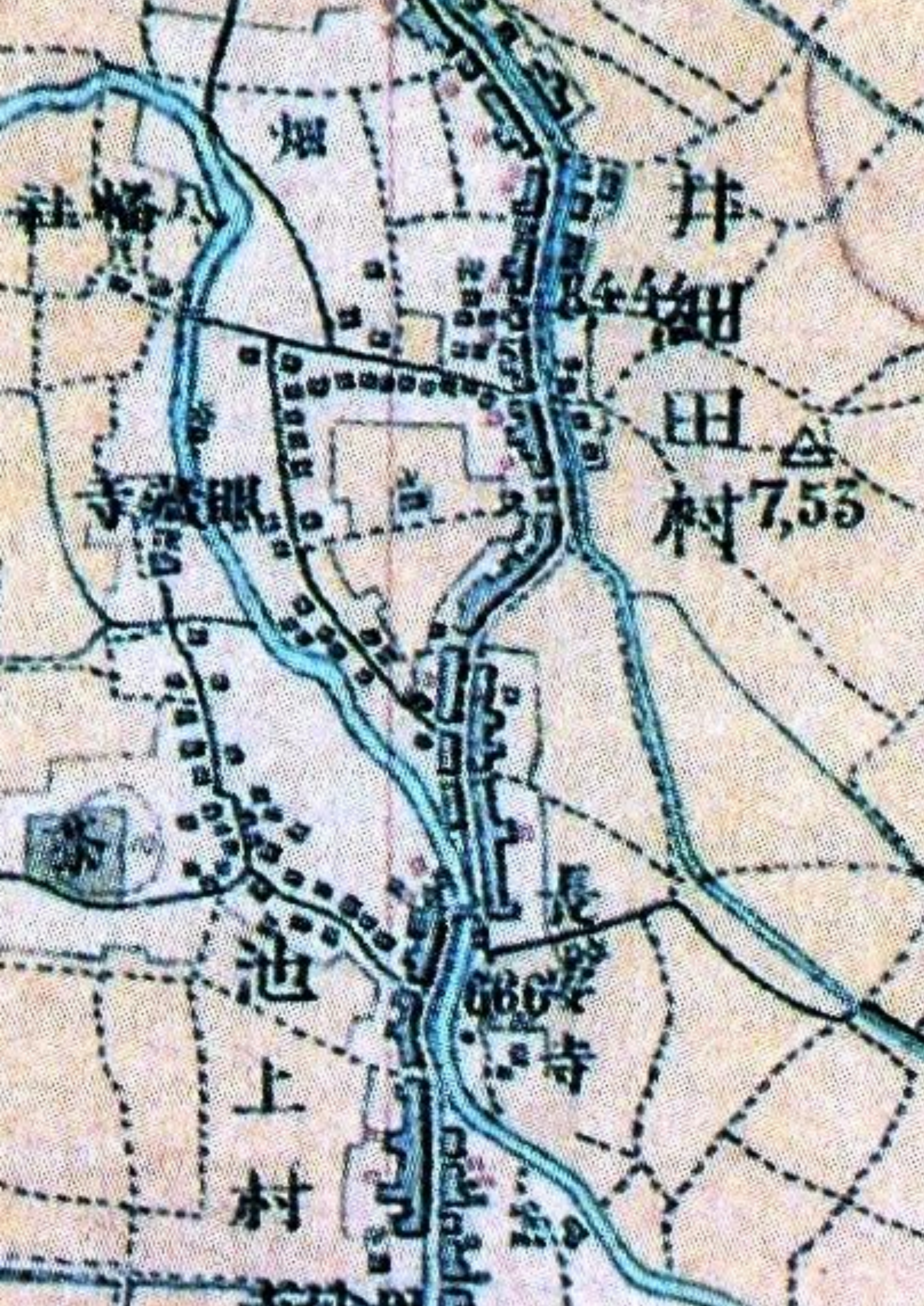
年　　代	で　き　ご　と
１５１５（永正１６年）	古文書に「いさい田」の地名がみられる
１５２３（大永　３年）	舞大夫「大橋家」小田原にやってくる
１５９０（天正１８年）	**豊臣秀吉、小田原城を攻める。**
１５９１（天正１９年）	八幡神社を創建。
１５９３（文禄　２年）	中戸川彦左衛門、妙円寺を開基する
１６６０（万治　３年）	井細田大橋で下田隼人、稲葉正則に直訴
１８１９（文政　２年）	御殿場村「日野屋」池上村で醸造業をはじめる
１８２４（文政　７年）	浅田兄弟、常陸国祝村で、親の敵を討つ
１８３０（文政１３年）	小田原の商人、井細田村の小商取り締まりを藩に迫る
１８５０（嘉永　３年）頃	穴部用水完成
１８７３（明治　６年）	「成美館」【足柄小学校の前身】眼蔵寺にできる
１８８９（明治２２年）	多古、井細田、今井を合わせ二川村が成立
１８９１（明治２４年）	１２月、久野、二川村大火災
１９０１（明治３４年）	近在の信徒により地蔵堂を再建
１９０８（明治４１年）	久野、富水、二川が合併、足柄村ができる
１９１７（大正　６年）	小田原地方初めての近代工場「小田原紡績」できる
１９２３（大正１２年）	**関東大震災**
１９２４（大正１３年）	久野川、流路変更工事完了
１９２５（大正１４年）	小田原―関本間に大雄山鉄道が開通する
１９３８（昭和１３年）	富士フィルム工場できる
１９４０（昭和１５年）	足柄町、小田原町と合併小田原市となる
１９４１（昭和１６年）	湯浅蓄電池工場できる
１９４５（昭和２０年）	**太平洋戦争終わる**
１９５３（昭和２８年）	足柄小学校、現在の地に完成、移転
１９７０（昭和４５年）	２５５号新道完成
１９７１（昭和４６年）	井細田の住居表示が、扇町２丁目となる

≪古写真≫　岡部忠雄氏、府川和義氏、小田原広報誌の写真を複製使用した。

表紙地図　明治１５，６年の井細田（迅速測図）

≪参考書等≫・小田原の史跡　小田原市教育委員会　・ふるさとの記録　小田原市
・　多古の郷土史　野頼徳治　・小田原地方商工業史　小田原商工会議所
・　考貞義鑑散策　鈴木　好　・多古風土記　藪柑子　実

平成２９年９月３０日　　編集　別生憲一　【家蔵版】


畑
八幡社
眼蔵寺
井田村
7,53
池上村